

「ゴー、ウエスト！ ヨーロッパ激烈2週間」の巻

其の伍

パリ3日目の朝。

今日は大事な使命がある。というのも、遥々イギリスからの客人があり、北駅まで迎えに行かねばならないのだ。

その客人というのが、かつてのトムスGBで知り合ったカヘー君だ。このレースっていいよね第9回に出演した彼、そのヒトである。

少しカヘー君の紹介をしようと思う。

彼は英国、サザンプトン工科大に在籍中の学生で、エフワンという舞台での仕事を夢見てチャンスがある度に様々なレース関連企業の「職業経験」プログラムに従事している。

トムスGBで、というのもその一環だったわけだ。現在はBARで、データ解析などの仕事をしている。

ちなみに、この「職業経験プログラム」っていうのは余り日本人には馴染が薄いけど、いわゆる片手間のアルバイトではなく、期間中は完全に休学して、企業の従業員として扱われているようだ。

だから仕事もより深い内容について経験でき、学生にとっては有難い、まさに「職業経験」となるわけだ。

素晴らしいのは、その職業経験の一つとして、レース業という少し特殊な業種に至るまで経験できるという、まさにレース文化の定着しているイギリスならではの対応だな、とつくづく思う。

日本でもこういう事、もっとすればいいのに。

さて、そのカヘー君も9月でBARとの契約が切れ、また学生生活に戻るといふ。いずれにしても、その場での全力を尽くして欲しい。ただ、カヘー君と話していて一つだけ気になるのは、「職業経験」という本質を何処まで活かせるかということだ。

つまり、確かに「職業経験」として数々の仕事をするだろうが、それらはあくまでも「断片の一つ」であり、その職業の入り口にいる事には変わらないのである。例えば、それは百科事典の表紙をめくったという程度でしかない。

どんな仕事でも同じなのだけど、極めようとなると奥が深い。その経験を本当に有意義なものとするには、やはりいち早く「学生」という、守られた立場を卒業し就職をすることにある。

しかし「経験」があることは、その他の学生に比べ就職時に大きなアドバンテージがあることは間違い無い。学生に戻った際は「今やるべきこと」をしっかりと整理してみたい。まあ、勤勉な彼ならそんなことは百も承知だろう。

話がそれた。

昼前、北駅のユーロスター用コンコースで到着を待つ。予定時間から10分ほど遅れて「おっ！着た着た！！」

フランスの新幹線、TGVにそっくりな黄色の先頭車両が目をつく。ドアが開くと共に、大量の乗客が流れて行く。

その中にひととき大柄なアジア人を見つけた。目の前にいるからこっちに気付くかな、と思っていたがその気配が無い。仕方なく声をかける。

「やあ、来たね」と握手を交わして、「2年ぶりかな？」などと話す。「髪の色が違うから、周りと同化してて分からなかったです」「そう？」

嬉しい事を言ってくれるじゃないの。目鼻立ちは思いっきり日本人の私にむかって。ともかく無事会えて良かった。

その後地下鉄で彼のホテルへ行き、荷物を置いてあちこち散策。「東京と変わらないでしょ？」という私に、「今来たトコなのに、そんなコト言わないで下さいよ・・・」そりゃそうだ、これは失敬。

この日一番の収穫といえば、かのルーブル美術館へ行った事だ。大きいだろうな、とは予測していたが、実際には想像を遥かに凌ぐ大きさで、しかも長い歴史を感じさせる風格と気品を漂わせている。

正直言ってよく分からん美術品も多かったが、しかし、絵画の中には心を打つ作品もあったのは確かだ。でも最大の課題は名画といわれる「モナリザの微笑み」を観る事にある。広い回廊をあちこち歩き回ってようやく「モナリザこっち」の看板が目に入った。

いざ勇み足で進んで暫らくすると、係員がスゴイ形相でこっちに来る。「今日はもう終わりです(多分こういう意味だったと思う)」・・・えっ？長いこと歩いて、ようやく見付けたのに駄目って?? 疲れ足でせっかく着たのだ、ここで引き下がるわけにはいかない。「い、いや、でもね・・・」能面のような顔の彼女は間髪入れず、「駄目！」

「でもさ、ニッポンから遥々来て・・・」言葉を言い終わらないうちに、表情のないその顔から「もう終わりだ、つってんでしょ、わかんないわね(多分)」半分キレかけだ。

欧米では駄目なもんは駄目なのだ。そこにいくら同情すべき理由があろうと関係ない。日本との大きな違いだ。それにしても、今まで可愛い笑顔のパリジャンばかりに接していただけに、この能面女の登場には少しばかりショックだった。しかも、ルーブルまで来てモナリザも見れないなんて・・・。一度でいいから微笑んで欲しかった。

「仕方ないね、帰るか」の一言にカヘー君は「そうですね・・・」そして「僕もよく大英博物館に行きましたけど、何度行っても未だにロゼッタストーンにはお目にかかれないですから」と続ける。

おいおい、それ全然慰めになってないぞ。と思いつつ、まあ仕方ない、これも運。またの機会に、とガックシ肩を落として博物館を去るのであった。

コンコルド広場を散歩して、街をぶらつく。パリは頑張っただけで、大抵どんなトコでも行ける。この日もまた、イギリスから到着したばかりのカヘー君を連れ回し、ちょっと悪いコトしたかな、と感じつつもそれはそれで楽しいパリ3日目だった。

明るる朝。またしても北駅にて集合。実は訳があるのだ。カヘー君から「せっかくヨーロッパまで来たのなら、イギリスにも来ればどうですか」と誘われていたのだ。

最初は気が引けていたけど、既にパリを満喫した感がある今となっては「何か別の味」が欲しいのも事実。しかも昨日ユーロスターを目撃して以来、どうしても乗ってみたいとなったというもある。何ととっても列車でのドーバー越えなんて、ロマンチックじゃない？

で、早々に駅でユーロスターの切符を買いに来た、と。そういう訳だ。

ちょっとばかシタイ出費ではあったけど、まあいいさ。かくして、無事パリ→ロンドンへの切符を手に入れることが出来た。

さて、今日は何をしよう・・・。やっぱり「歩こう作戦」しかない！

てくてくとノートルダム大聖堂のあるシテ島へ、そしてステンドグラスの美しいサント・シャペルへ行く。セーヌ川を渡りながら、「テムズ川の景色と変わらないですね」「ほら、ここにビッグベンがあったら・・・」と言うカヘー君。う～ん、確かに。ま、同じヨーロッパってことでいいじゃないの。細かいことは気にしない、

気にしない。

そういえば、この後デパート巡りをしながら屋上のカフェで一服。これがまた絶景で、パリ市内を一望できる最高のロケーション。次の目標は何とんでもエッフェル塔！これしかない。
てくてく、まあホントによく歩いたものだ。塔の真下でソフトクリームを食べながら、しげしげと見物。

さすがお洒落の街パリ、エッフェル塔は立派なトラス構造だけど、そのトラスの一つ一つが全て葉のレリーフでデザインされている。

トラスはただの構造体なのだから別にストレートな棒で充分な筈だが(逆に、その方がかえって軽量かつ強固に出来たと思うのだが・・・)、そんな無機質なデザインはパリでは許されないのだろう。

いずれにせよ、こんなにデカイ構造物を100年も前に造ることが出来たというのは、やはり驚きを隠せない。

これならモスラが卵を産み付けに来ても、充分その荷重には耐えられるよ。きっと。

こうして過ぎて行く、パリ4日目であった。いよいよ明日は待望のドーバー越えだ。

